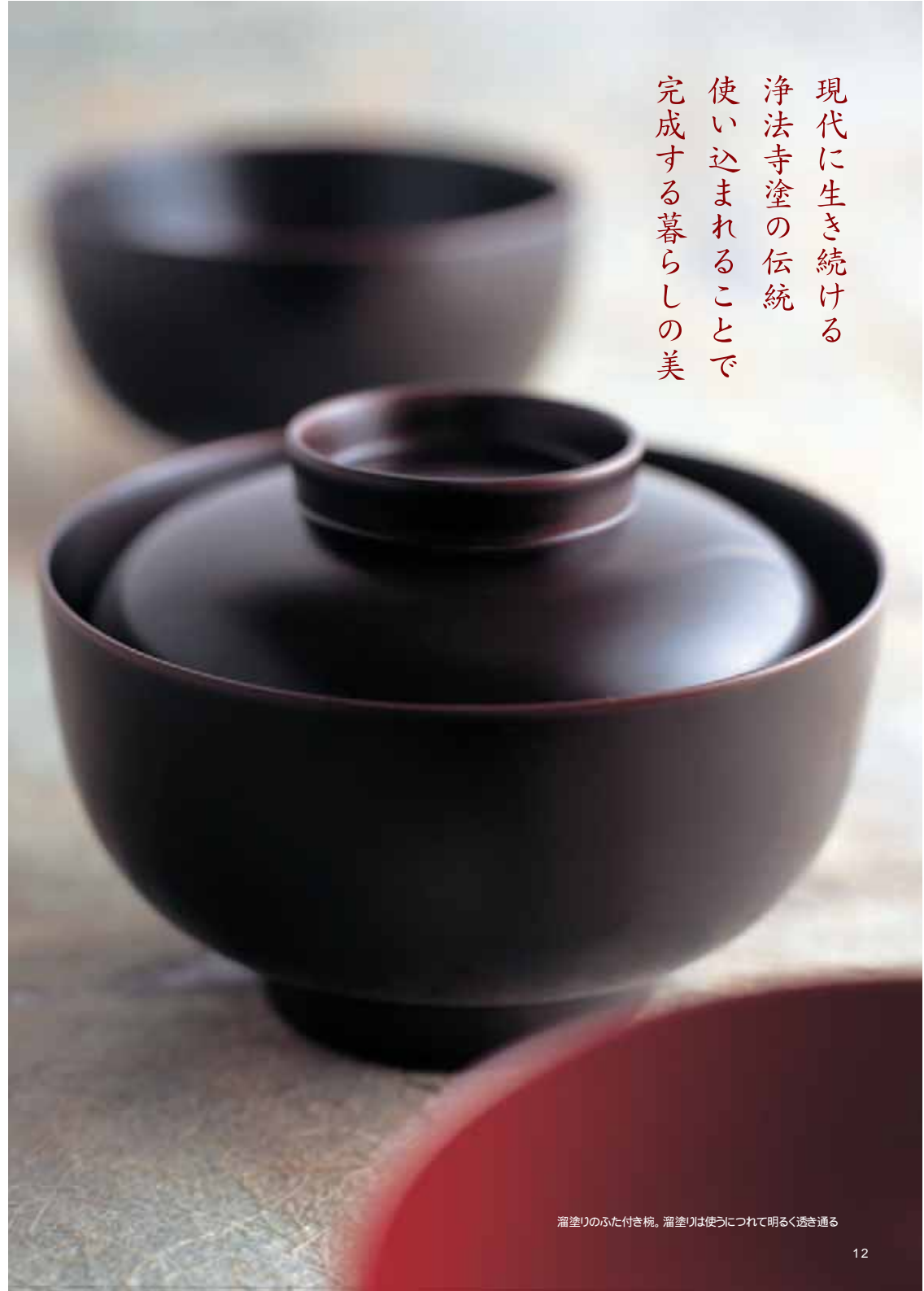


現代に生き続ける
浄法寺塗の伝統
使い込まれることで
完成する暮らしの美



浄法寺漆芸の 殿堂「滴生舎」で 研鑽を積む若き塗師

大森俊三さんから漆掻き職人が掻き採った漆。風土が育んだ漆木の生命は、天台寺のふもとに構える滴生舎へと届けられる。漆を待ち受けるのは浄法寺漆芸の伝統を継承する若き塗師たち。輪島や津軽など、ほかの漆芸の職人が見たら「うらやまむほどの最高級漆をいかに使いながら研鑽の日々を送る。小田島勇さんはそのひとり。以前は、木地作りを行っていたという滴生舎の若き塗師だ。

小田島さんは自らの境遇を「塗師冥利」と表現する。「いらいら国産漆と表示されていても、実際は中国産の漆が混ぜられることがある」とり、一般の職人が純国産の漆を使うことは難しいのが現状なんです。その点、私たちは地元で採れた最高級の漆を使えるわけですから本当に幸せだと思います。職人であれば浄法寺の漆を一度塗ればその良さを分かち合ってもらえると思うんです。つやがあるて強度もある。単色で美しく塗り上げる浄法寺塗の伝統は、地元産の漆でなきゃ出せません」と小田島さん。

その一方で浄法寺塗の伝統を守るといって重圧も常に抱えているという。「浄法寺塗の伝統は堅牢さです。何度も漆を重ね塗



下塗り作業。仕上げまで研磨と塗りを繰り返す。ちなみに漆は乾燥させるのではなく、適度な温度と湿度を与えることで硬化する

りすることはもちろんですが、下塗りに入る前に木地を丈夫にするためにいくつもの工程があります。漆を塗って木地を固め、椀の上縁に施す布着せ、地の粉珪藻土を焼いたもの(をまき付ける時地など、本当に手間がかかる作業ばかり。でも、そのひとつひとつが浄法寺塗の歴史。手を抜くのは簡単なものかもしれませんが、ここで塗師を続ける以上、それをやたらおしまいだなど自分に言い聞かせているんです」。

そう語る小田島さんは年代ものの漆器の型をたつて復元させるなど、連続と続く土地の漆文化に新風を吹き込む作業も行っている。昔の漆器を見つめ直すことで新たな発見もあるそうだ。



浄法寺塗伝統の片口。かつてはどぶろくを酌みかわす酒席などで使われたという



滴生舎の若き塗師・小田島勇さん。滴生舎には小田島さんの作品のほか、浄法寺塗を使う市内外の作家の作品が並び

装飾を好まず、質素に仕上げる浄法寺塗。その魅力について小田島さんは「浄法寺塗は仕上げ塗りの後に磨くことはありません。最後まで仕上げないんです。仕上げるのは使い手。使っているうちに自然とつやが出てきます。塗り師と使い手がひとつの椀を完成させる。私は浄法寺塗のそんなところに魅かれます」と言いつつ笑った。



塗り上げられたばかりの漆はうるわしいほどの輝き。数千年の歴史を持つ天然塗料だ

旅のガイド 浄法寺漆芸の殿堂「滴生舎」

「生命の滴」、「人と共生する滴」の意味を込めて命名された「滴生舎」は、木地から下塗り・上塗り、さらに販売までの一貫した生産体制で、作業の様子も見学できる。また、漆の絵付体験も行っている。(要予約)

滴生舎
〒028-6941
岩手県二戸市浄法寺町御山中前田23-6
TEL0195-38-2511 FAX0195-38-2610
開館時間 / 8時30分～17時
休館日 / 年末年始(12月29日～1月3日)、1月
から3月までは毎週火曜日
交通 / 東北新幹線二戸駅から浄法寺行きバスで約30分「天台寺」下車、八戸自動車道浄法寺ICから5分



【巻末MAP D-2】

溜塗りのふた付き椀。溜塗りは使うにつれて明るく透き通る